

探訪 北の風景 89

鴨々川今昔 札幌市中央区

青木和弘

札幌市内を東西に分ける創成川（全長14・2キロメートル）の流れは、豊平川の幌平橋より少し上流から引いている。護国神社や中島公園内を流れ、公園西側の外周からススキノの南7条あたりまでが、もともとの川の姿を残し、樹木の緑に包まれて歴史的な見どころが多い。この上流2・5キロメートルほどを「鴨々（かもかも）川」と呼ぶ。曇り空で、小雨が少し心配な空模様の休日、この鴨々川を散策した。

地下鉄「幌平橋」駅から、ぶらぶらと250メートルほど南へ歩くと、樹木が、苔むした歩道を覆い、近くで野鳥がさえずり、しっとりとした空気に包まれる。間もなく行き止まりで、朱色に塗られた堤防内側の水門がある。豊平川の増水に備え、

氾濫を防ぐ役割を持つ。近くに、開発局の防水資材倉庫がある。歴史的にも、豊平川の防災ポイントなのだ。

開拓期までの豊平川は、氾濫を繰り返し、何本もの支流のある網状の流路で、中島公園は鴨々川がつくった中州だったという。1869（明治2）年、開拓使の札幌本府の経営が始まると、飲料水や防火用水、工業用水、舟運などの多目的用水路が必要になり、創成川の建設が進んだ。まず、豊平川の流れを堤防で固定することに力が注がれ、創成川に水を取り込む水門が建設された。明治6年の氾濫で堤防が破損したときは、水門を守るため当時の判官、松本十郎が自ら水中に飛び入り、薩摩（現鹿児島県）から来ていた作業員を指揮して事なきを得たという。また、翌年に大水門を築き、札幌市街に通す小川を補修して7月に完成。江戸時代からあった「大友堀」を「創成川」と改名した。

当時、鴨々川はいまより深く流れも急で、切り出した木の流送にも利用した。豊平川の水門付近は、いかだで運ばれた原木の貯木場になり、札幌の建設に必要な原木は鴨々川で流送して製材所に運ばれた。水流に勢いをつけるため、2か所に水門を設けて落差をつくり、水を溜めて一気に流したという。

現在、護国神社の敷地から中島公園内は広くて浅い流れで、親水公園として子どもたちが水に入って遊び、水生生物の観察などができるように



豊平川の堤防の内側にある創成川の取水口はマンションに取り囲まれている。ここが創成川の始まり地点。堤防の外側（川側）にも水門があつて豊平川の増水に備えている。付近は歴史的にも豊平川防災の重要ポイントだ

整備されている。流れの一部は公園の池に注ぎ、川岸に設けたベンチには、本を読んだり、犬と戯れたり、思い思いに休日を通す人々の姿があつた。

コンサートホール「キタラ」の西側で川の幅は狭まり、木が川に被さるように茂っている。少し時期の過ぎたアジサイが名残を惜しむように咲いていた。小さな橋を渡ると、辺りは1960年ごろまで呉服屋や染物屋が何軒もあつた地域で、染物屋が色とりどりの友禅を竹ざおに引っかけ、川で水洗いしている光景が見られたという。水がきれいで水量も多かった。

そうした場所に渡辺淳一文学館がある。カフェが併設され、軽食とワインやビールが楽しめる。粋な「昼酌セット」（1300円）は、おつまみ1品とクラフトビール2杯が付く。ただし、新型





中央区南7条西4丁目の鴨々川。付近にはニシキゴイが放流されている。夜は、高層ホテルや飲食店のネオンサイン、行き交う車のヘッドライトやテールランプの赤い光も混ざり合って、盛り場であるススキノ独特の光景を川面に映す

中島公園内の鴨々川は広く浅く、子どもたちが遊べる場所になっている。この日も、親子連れが魚捕りや虫捕りをしていた



渡辺淳一文学館（中央区南12条西6丁目414）は、医者から作家へ転身して東京で暮らした渡辺の故郷札幌に設立された

コロナのまん延防止重点措置で、この日は酒類の提供は中止だった
中島公園には国の重要文化財である「八窓庵」と日本庭園がある。池にカモのつがいがのんびり浮かんでいた。
中島公園を過ぎると川は飲食店ビルやホテルの間を流れ東に向かう。駅前通りにかかる藻山（もやま）橋付近にはニシキゴイが放流されていて、夜は、川面に飲食店のネオンが独特の彩りを添える。この辺りまでが鴨々川の風情を楽しめるエリアだろう。
札幌市では、「創成川・鴨々川 川めぐりマップ」を配布している。多彩な見どころを紹介しているので、ぜひ参考にして散策を楽しんでほしい。市のホームページでも見られる。